

# 「話し手情報・聞き手情報」と 文末形式

—日本語と中国語の場合

井上優

## ◆要旨

木村・森山(1997)は、情報のやりとりに関わる文(いわゆる平叙文、確認文、質問文、疑念表出文)の関係を「話し手情報の確定・不確定」、「聞き手情報への依存・非依存」という二つの観点により整理している。しかし、この枠組みでは、これらの文タイプの使い分けに関する日中両語の相違は説明できない。本論では、その相違が、「話し手情報の確定・不確定」ということの確認が、聞き手領域(日本語)または話し手領域(中国語)において、すでに不要な段階にあるか(平叙文・質問文)、まだ確認が必要な段階にあるか(確認文・疑念表出文)」という形で整理できることを述べる。

## ◆キーワード

平叙文、確認文、質問文、疑念表示文、  
話し手領域、聞き手領域

## ◆ABSTRACT

Sentences used for information exchange in communication are divided into four types: those for assertion, those for confirmation, those for requesting information, and those for expressing the speaker's doubt. Kimura & Moriyama (1997) argue that the choice of sentence type depends on two factors: (i) whether the speaker regards the information in question as true or not, and (ii) whether the speaker requests the hearer to answer or not. This paper points out that their theory cannot explain differences in the choice of sentence type between Japanese and Chinese, and argues that the necessity of confirmation in the speaker's (Chinese)/hearer's (Japanese) territory plays an important role in the choice of sentence type.

## ◆KEY WORDS

sentences for assertion, sentences for confirmation, sentences for requesting information, sentences for expressing the speaker's doubt, necessity of confirmation in the speaker's/hearer's territory

## Speaker's/Hearer's Information and the Choice of Sentence Type

MASARU INOUE

# 1 はじめに

木村・森山 (1997) (初出は1992年) は次のことを示した論文である。

(1) 日本語でも中国語でも、情報のやりとり (情報提供・情報要求) に関わる文——いわゆる平叙文、確認文、質問文、疑念表出文——の関係は、「話し手情報の確定・不確定」および「聞き手情報への依存・非依存」という二つの観点により体系的に整理できる。

「話し手情報の確定・不確定」、「聞き手情報への依存・非依存」にもとづく記述の枠組みは一般性が高く、情報のやりとりに関わる文の関係を自然な形でとらえることができる。しかし、この枠組みでは、平叙文、確認文、質問文、疑念表出文の使い分けに関する言語間の相違は必ずしも説明できない。本論では、木村・森山 (1997) の議論を出発点として、情報提供・情報要求に関わる文の使い分けの言語差を記述するための枠組みについて考える。

## 2 木村・森山 (1997) の議論の概略

木村・森山 (1997) の議論は、細部まで含めればかなり広い範囲に及ぶ。ここではその根幹部分について概略的に説明する。

木村・森山 (1997) の議論の対象は、次の四つの文である (例文は井上)。

①無標平叙文 (無標の確定情報文: いわゆる平叙文)

(2) a. これはあなたのだ。

b. 这是你的。

これだ あなたの

②有標平叙文 (有標の確定情報文: いわゆる確認文) <sup>[注1]</sup>

(3) a. これはあなたのだろう (あなたのだよ、あなたのだね) ?

b. 这是你的吧?

これだ あなたの だろう

③無標疑問文 (無標の不確定情報文: いわゆる質問文)

(4) a. ここはどこ?

b. 这是什么地方?

ここだ どこ

④有標疑問文 (有標の不確定情報文: いわゆる疑念表出文) <sup>[注2]</sup>

(5) a. ここはどこだろうか (どこかなあ) ?

b. 这是什么地方呢?

ここだ どこ 疑念

以下では、これらの文タイプを便宜的に「無標平叙文」「確認文」「無標疑問文」「有標疑問文」と呼ぶ。「有標平叙文」を「確認文」と呼ぶのは、そのほうが直感的にわかりやすいからである。また、「質問文」「疑念表出文」という用語を用いないのは、第4節で述べるように、日本語と中国語では無標疑問文・有標疑問文の意味が異なるからである。

木村・森山 (1997) は、日本語でも中国語でも、無標平叙文、確認文、無標疑問文、有標疑問文の関係は、「話し手情報の確定・不確定」および「聞き手情報への依存・非依存」という観点により、次の (6) のように整理できるとする。

(6)

話し手の情報 聞き手 情報への態度	確 定	不確定
依 存	有標平叙文 (確認文)	無標疑問文 (質問文)
非依存	無標平叙文 (平叙文)	有標疑問文 (疑念表出文)

(木村・森山 (1997: 247) の表を簡略化)

「話し手情報の確定・不確定」とは、話し手の中で当該判断以外の判断が排

除されているか（話し手情報確定）、複数の判断が併存しているか（話し手情報不確定）ということである<sup>[註3]</sup>。また、「聞き手情報への依存・非依存」とは、聞き手に情報提供を求めるか（聞き手情報依存）、求めないか（聞き手情報非依存）ということである。

疑問文は、「行きますか、行きませんか?」、「誰が行きますか? (x<sub>1</sub>が行きますか、x<sub>2</sub>が行きますか、x<sub>3</sub>が行きますか…)」のように、話し手の中で複数の判断が併存していることを述べる「話し手情報不確定」の文である。無標疑問文は、聞き手に情報提供を求める「聞き手情報依存」の疑問文、また、「だろうか、かなあ」、「呢ne」を付加した有標疑問文は、話し手が有する疑問を述べるだけの「聞き手情報非依存」の疑問文として位置づけられる。

無標平叙文は、話し手の中で当該判断以外の判断が排除されており、聞き手に情報提供を求めない「話し手情報確定・聞き手情報非依存」の文である。また、「だろう、(よ)ね」、「吧ba」を付加した確認文（有標平叙文）は、聞き手に情報提供を求める点は無標疑問文と同じだが、当該判断以外の判断が排除されている（「\*行くでしょう、行かないでしょう?」「\*行きます(よ)ね、行きません(よ)ね?」、「\*誰が行くでしょう?」「\*誰が行きます(よ)ね?」のように言えない）という点は無標平叙文と同じなので、「話し手情報確定・聞き手情報依存」の文となる<sup>[註4]</sup>。

無標平叙文が「聞き手情報非依存」の文、無標疑問文が「聞き手情報依存」の文であることは、次のような原則の形で説明される（(7)と次の(8)は木村・森山（1997）の説明を簡潔に言い換えたもの）。

- (7) a. 話し手の側で情報が確定していることを聞き手に示すことは、聞き手が持たない情報を提供する（聞き手情報に依存しない）ことを含意する。（確定情報文の聞き手情報非依存の原則）
- b. 話し手の側で情報が確定していないことを聞き手に示すことは、聞き手情報の提供を求める（聞き手情報に依存する）ことを含意する。（不確定情報文の聞き手情報依存の原則）

また、有標平叙文が「聞き手情報依存」の文、有標疑問文が「聞き手情報非依存」の文であることは、「ずらしの原則」として説明される。

- (8) a. 話し手の側で情報が確定していながら、聞き手情報の提供を求める（聞き手情報に依存する）場合には、そのことを示す形式を付加せよ。（ずらしの原則2）
- b. 話し手の側で情報が不確定でありながら、聞き手情報の提供を求めない（聞き手情報に依存しない）場合には、そのことを示す形式を付加せよ。（ずらしの原則1）

このように、木村・森山（1997）では、情報のやりとりに関わる四つの文タイプの意味が一般性の高い形で体系的に整理されている。

### 3 課題

木村・森山（1997）の枠組みは、日本語・中国語以外の言語にも適用可能である。例えば、英語の付加疑問文は、「話し手情報確定・聞き手情報依存」の有標平叙文として位置づけられる。木村・森山（1997）も、「情報の確定性と聞き手情報依存の有無という関係は、ある程度普遍的なものだと言うことも可能であろう」（p265）と述べている。

その一方で、無標平叙文、確認文、無標疑問文、有標疑問文の使い分けに関する言語差を体系的に整理することは、課題として残されている。木村・森山（1997）も、神尾（1990）の「情報のなわ張り理論」を念頭に置きつつ、「運用的な問題として、聞き手の情報に依存・非依存することを示すべき状況についてはそれぞれの言語において大きく異なるであろう」（p247）として、次のことを述べているが、(6)の枠組みとの関係は述べられていない。

- (9) 中国語の場合、話し手の認識こそが「文の述べ方を決める」基準となるのに対し、日本語の場合、聞き手の認識を談話の内部で尊重しなければならない。（p269: [ ] 内は井上補足）

以下、第4節から第6節では、無標平叙文、確認文、無標疑問文、有標疑問文の使い分けに関する日中両語の相違が（9）の相違に還元されることを見る。

そして、第7節では、(9)をふまえて、情報のやりとりに関わる日中両語の文の意味について再整理することを試みる。

## 4 無標疑問文と有標疑問文の意味

木村・森山(1997)は、日本語の有標疑問文は「聞き手情報に依存しない」ことの表示に重点があるが、中国語の有標疑問文は「話し手の〈はてな?〉と疑い、思い惑う気持ち」の表出に重点があることを指摘している。実際、日本語の有標疑問文は、話し手が有する情報について聞き手にクイズを出す場合に使えるが、中国語の有標疑問文はクイズとしては使えない(木村・森山1997)。

(10) 甲：わたし、四月に結婚するの。

乙：誰と？

甲：さあ、誰とでしょうか？(あててみて。)

你 猜一猜 和 谁？/#和 谁 呢？

あなた あててみる と 誰 と 誰

(木村・森山(1997:259)の例文をもとに作成)

また、次の(11)の場面では、話し手と聞き手はともに情報を持たず、日本語では有標疑問文を用いる必要があるが、中国語では“呢”を用いた有標疑問文は不自然であり、無標疑問文を用いなければならない(井上2013)<sup>[注5]</sup>。有標疑問文(11d)が自然に使えるのは、(12)のように、それまで意識していなかった疑問がその場で話し手の意識に上ったという場合である。

(11)(ある夫婦が誘拐されて知らない場所に監禁された。夫が不安な気持ちで妻に)

a.#ここ、どこ？ [無標疑問文]

b. ここ、どこだろう？ [有標疑問文]

c. 这 是 什么地方 呀？ [無標疑問文]

ここ だ どこ 強調

d.#这 是 什么地方 呢？ [有標疑問文]

ここ だ どこ 疑念

(12)(久しぶりに故郷に帰って街を歩いていたら、見覚えのない風景に出くわした)

这 是 什么地方 呢？((はて?)ここはどこだろう?)

これ だ どこ 疑念

無標疑問文と有標疑問文の使い分けに関する日中両語の相違は、次のように整理できる(井上2013)。

(13)

		日本語	中国語
話し手に 情報なし	聞き手に情報あり	無標疑問文	無標疑問文
	「聞き手に情報あり」未確定	有標疑問文	
「話し手に情報なし」未確定			有標疑問文

日本語では聞き手側の情報のあり方によって、また中国語では話し手側の情報のあり方によって、無標疑問文と有標疑問文が使い分けられる。

日本語の無標疑問文は、聞き手側に情報がある(聞き手情報に依存できる)として、話し手が提示する問題を解決するよう聞き手に指示する文である。聞き手に問題の存在を認識させるだけで問題解決までは指示しない(聞き手情報に依存しない)場合は、有標疑問文が用いられる。

一方、中国語の疑問文は、当該の問題が話し手側に存在することを述べる文であり、無標疑問文と有標疑問文も、問題が話し手の側で解決不能な問題として確定しているか否かによって使い分けられる。(11)のように、当該の問題について話し手側に情報がない(話し手側で解決不能)ことが確定している場合は、聞き手情報に依存できるか否かに関係なく、無標疑問文が用いられる。“呢”を用いた有標疑問文が用いられるのは、(12)のように、それまで意識していなかった疑問が話し手の意識に上っただけで、当該の問題について話し手に情報がない(話し手側で解決不能)とは確定していない場合である。「〈はてな?〉と疑い、思い惑う気持ち」(木村・森山1997)、「いろいろ考えたがなおよくわからず、いったいどうなのかといぶかる気持ち」(白水社中国語辞典：“呢”1

の①) という説明も、実質的にはこのことを指すと見られる。

## 5 確認文(有標平叙文)の意味

日本語と中国語は、確認文(有標平叙文)の意味も異なる(井上2016)。

日本語の「だろう」「(よ)ね」を用いた確認文は、現実世界に関する話し手の判断を示して「聞き手の側でこのことを確認してほしい」と指示する文である。一方、中国語の“吧”を用いた確認文は、「話し手の信念が現実と一致することを確認したい」ということを述べる文である。日本語の確認文は「確認指示文」であり、同意要求のニュアンスをともなうが、中国語の確認文は「確認希求文」であり、同意要求のニュアンスは希薄である<sup>[註6]</sup>。

この相違が明確に表れるのは、「聞き手はわかっていない(あらためて確認せよ)」という気持ちで「だろう」を用いる場合である。この場合、“吧”は使えない(呉2002参照)。

(14) (「これ、あなたのですよね?」と聞かれて「何を誤解しているの」という気持ちで)

- a. それはあなたのでしょうか? (#あなたのだね?/#あなたのだね?) よく見てよ!
- b.#那 是 你 的 吧? 你 好好 看看!  
それ だ あなた の だろう あなた よく 見る
- c. 那 是 你 的 呀。 你 好好 看看!  
それ だ あなた の 強調 あなた よく 見る

(14) では、聞き手の側で確認済みであるはずのことが確認されていないことに対する異議を述べるのに、聞き手への確認指示を表す「だろう」を用いている。これは、聞き手が遂行すべき動作が遂行されなかったことに対する異議を述べるのに行為指示文を用いる(例(15)、井上1993)のと並行的な現象である(「(よ)ね」はこのような強制的な確認指示は表さない)。聞き手への確認指示を表さない“吧”にこのような用法はない。

(15) (学生が締め切りの翌日にレポートを出しに来た)

君ねえ、ちゃんと昨日のうちに出してよ↓。(↓:非上昇)

日本語の確認文が確認指示文、中国語の確認文が確認希求文であることは、真偽疑問文との使い分けからも確認できる(井上2016)。

(16) (目の前で転んだ人を助け起こして)

- a. 大丈夫ですか?
- b.#大丈夫でしょう?/#大丈夫ですよ?/#大丈夫ですね?
- c.#不要紧 吗?  
問題ない か
- d. 不要紧 吧?  
問題ない だろう

(16) は、トラブルに遭った聞き手に「私は聞き手は大丈夫だと信じる(聞き手の無事を願う)が、現実はどうであるかはわからない」という気持ちで声をかける場面である。この場合、日本語では疑問文「大丈夫ですか?」を用いる。確認文「大丈夫でしょう?」「大丈夫ですよ?」「大丈夫ですね?」を用いると、根拠もなしに話し手が一方的に「大丈夫だ」と判断し、聞き手の側で「大丈夫である」ことを確認するよう求める(聞き手の同意を求める)ことになり、(16)の場面では不適切である。「(よ)ね」は(14)のような強制的な確認指示は表さないが、(16)のような場面で使いにくいことから、やはり「聞き手の側で確認してほしい」という確認指示の意味を含むと言える。

一方、中国語では、同じ場面で「私は聞き手は大丈夫と信じるが、この信念が現実と一致することを確認したい」として、確認文“不要紧吧?”を用いる。この場合、聞き手に対する同意要求の意味はなく、むしろ聞き手の無事を祈る気持ちが感じられる発話になる。真偽疑問文“不要紧吗?”を用いると、「(このようなトラブルに遭って)大丈夫なんですか?」のように、聞き手が無事であることを疑うような質問になり、この方が(16)の場面では不適切である。第2節の例(3b)“这是你的吧?”も、「これは聞き手のものだと思えるが、この信

念が現実と一致することを確認したい」ということを述べているだけで、日本語の確認文(3a)「これはあなたのだろう？(あなたのだよね？/あなたのだね?)」に感じられる同意要求的な意味は希薄である。

## 6 無標平叙文の意味

日本語と中国語は、確認文(有標平叙文)の意味が異なることに連動して、無標平叙文の意味も異なる。具体的には、日本語の無標平叙文は「この情報を聞き手の側で(確認なしでそのまま)受容せよ」という意味の文、中国語の無標平叙文は「この情報は話し手にとって(確認するまでもなく)真である」という意味の文である。

このことが明確に表れるのは、聞き手のなわ張りに属する情報に言及する場合である。日本語ではこの場合、「話し手がこのように認識することについて聞き手に承認を求める」という気持ちで「ね」を用いる必要があるが(神尾(1990)の言う「必須のネ」、中国語では無標平叙文を使えばよい。

(17) (聞き手が髪を切ったのを見て)

- a. あ、髪を切りましたね。とても似合いますよ。 [確認文]
- b. #あ、髪を切りました。とても似合いますよ。 [無標平叙文]
- c. 哟, 你 剪 头发 了, 真 好看。 [無標平叙文]  
あ あなた 切る 髪 変化 実に 美しい

日本語の無標平叙文は、聞き手にない情報を提供するという意味(神尾(1990)の言う「情報の独占化」)になり<sup>[註7]</sup>、それを避ける場合は「ね」を用いる。中国語の“你剪头发了”は、話し手が見たことを述べているだけで、聞き手に対する情報提供の意味はない。確認文“你剪头发了吧?”は、文字通り「髪を切ったことを確認したい」という意味の文になる。

次の例についても同じである。

(18) (生徒たちの点呼が終わり全員そろったことを確認して)

- a. はい、全員そろいましたね。出発しましょう。 [確認文]
- b. はい、全員そろいました。出発しましょう。 [無標平叙文]
- c. 好, 大家 都 到齐了。出发 吧。 [無標平叙文]  
はい 全員 すべて そろった 出発 意向

(18)は、「全員そろった」ことは聞き手もわかっていると想定できる場面であり、日本語では「ね」を用いるほうが自然である(神尾1990の言う「任意のネ」)。この場面で無標平叙文を用いると、発話現場の状況について判断をおこなう権利を話し手が独占しており、聞き手に対して「全員そろった」ことを宣言するという意味になる。それを避ける場合は、やはり「ね」を用いる。

一方、中国語の無標平叙文(18c)は、話し手がある場で認識したことを述べているだけで、判断の権利を独占的に有する立場からの宣言というニュアンスはない。次の(19)のように確認文を用いると、文字通り話し手が「全員そろったことを確認したい」として聞き手に確認をおこなう文になる。

(19) (点呼が終わったところで、全員そろったことを再度確認する)

- 大家 都 到齐了 吧? 好, 那就 出发 吧。 [確認文]
- みな すべて そろった 確認 はい それでは 出発 意向  
(全員そろいましたよね? (そうですね?) はい、では出発しましょう。)

疑問文の場合と同様、無標平叙文と確認文(有標平叙文)の使い分けは、基本的には、日本語では聞き手側の情報のあり方によって、中国語では話し手側の情報のあり方によって決まる。整理すると次のようになる(井上2013)。

(20)

		日本語	中国語
話し手に 情報あり	聞き手に情報なし	無標平叙文	無標平叙文
	「聞き手に情報なし」未確定	確認文 (有標平叙文)	
「話し手に情報あり」未確定			確認文 (有標平叙文)

## 7 情報のやりとりに関わる文の意味の相違

第4節から第6節で述べたことは、次のようにまとめられる。

- (21)a. 中国語の無標平叙文・無標疑問文は、「当該の情報が真である／当該の問題が解決不能である」ことが話し手にとって確認済み（これ以上の確認は不要）であることを表す。
- b. それと対立する形で、中国語の確認文（有標平叙文）・有標疑問文は、「当該の情報が真である／当該の問題が解決不能である」ことが話し手にとって確認済みではない（まだ確認が必要である）ことを表す。
- (22)a. 日本語の無標平叙文・無標疑問文は、「当該の情報を聞き手の側で確認する／当該の問題を聞き手の側で認識する」プロセスは不要として「当該の情報を受容する／当該の問題を解決する」よう指示することを表す。
- b. それと対立する形で、日本語の確認文（有標平叙文）・有標疑問文は、「当該の情報を聞き手の側で確認する／当該の問題を聞き手の側で認識する」よう指示する（「当該の情報を受容する／当該の問題を解決する」ことまでは指示しない）ことを表す。

木村・森山（1997）の枠組みに変更を加える形で、(21) と (22) を表の形でまとめると次のようになる（ゴシック体の部分が変更部分）。

### (23) 中国語

話し手の情報 聞き手領域での確認	確 定	不 確 定
不 要	無標平叙文	無標疑問文
必 要	確認文（有標平叙文）	有標疑問文

### (24) 日本語

話し手の情報 聞き手領域での確認	確 定	不 確 定
不 要	無標平叙文	無標疑問文
必 要	確認文（有標平叙文）	有標疑問文

木村・森山（1997）の言う「話し手情報の確定・不確定」は、実質的に平叙文と疑問文を区別するための概念であるから、この部分に変更する必要はない。

木村・森山（1997）の枠組みと異なるのは、「聞き手情報への依存・非依存」という概念を「聞き手領域（日本語）・話し手領域（中国語）での確認の要・不要」という概念に置き換えている点である。

第4節から第6節で見たように、中国語の無標平叙文は聞き手が持たない情報を提供する（聞き手情報に依存しない）ことは含意せず、無標疑問文も聞き手情報の提供を求める（聞き手情報に依存する）ことは含意しない。これは、木村・森山（1997）の言う「確定情報文の聞き手情報非依存の原則」（=7a）と「不確定情報文の聞き手情報依存の原則」（=7b）は、中国語にはあてはまらないということである。

また、やはり第4節から第6節で見たように、無標平叙文、確認文（有標平叙文）、無標疑問文、有標疑問文の使い分けに関する日本語と中国語の相違は、つまるところ、木村・森山（1997）が指摘する「中国語の場合、話し手の認識こそが〔文の述べ方を決める〕基準となるのに対し、日本語の場合、聞き手の認識を談話の内部で尊重しなければならない」（=9）という相違に還元される。

この二点をふまえると、無標平叙文・無標疑問文と確認文（有標平叙文）・有標疑問文の関係、ならびにこれらの文タイプの使い分けに関する日中両語の相違は、「話し手情報の確定（情報が真である）・不確定（問題が存在する）」ということの確認が、聞き手領域（日本語）または話し手領域（中国語）において、すでに不要な段階にあるか（無標）、まだ確認が必要な段階にあるか（有標）という形でとらえるのが自然である。





国語の対照研究論文集』pp.235-275. くろしお出版（初出：大河内康憲（編）（1992）  
『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』pp.3-43. くろしお出版）  
呉紅哲（2002）「「ダロウ」と「吧（ba）」の確認要求用法の比較」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』13, pp.69-81.  
杉村博文（1994）『中国語文法教室』大修館書店